蔵の中

津木林洋

昭和二十年八月六日朝、広島。

「しゃんとご飯食べんさい」

母の言葉も聞かず、少年は箸を投げ出すと、母屋を走り出た。夏の日差しがじりじりと照りつけており、暑い。

少年は敷地の隅にある蔵に向かった。重い扉を開け、下駄を脱ぐ。

中は薄暗くてひんやりとしている。板張りの床に俯せになり、頬を押し付ける。汗が一気に引いて気持ちがいい。

その時、蔵の中に目くらむばかりの光が差し込んだ。少年が覚えているのは、そこまでである。

どのくらい意識を失っていたのか、気がつくど土の上に倒れていた。蔵の外に飛ばされている。外は夜のように暗くなっており、ひどく埃が舞っている。喉が熱い。

頭を持ち上げて母屋の方を見ると、家がなかった。少年は四つん這いで近づこうとしたが、掌と膝頭が熱くて、あわてて立ち上がった。下駄を探したが、どこにもない。

蔵の中から火が噴き出してきた。少年は裸足の足裏の熱さを我慢しながら、母屋のあった場所に近づいた。

お母ちゃんら、どこへ逃げよった。

徐々に闇が引いて、視界が薄青くなった。少年はびっくりした。母屋の隣にあるはずの二階家もなく、その先もずっと建物がない。首を巡らすと、辺り一面視界を遮るものがない。遠くに赤い火が見える。蔵がなければ、ここがどこだか分からない。

少年は頬に痛みを感じた。触ると、ぬるつとした。掌に血のような脂のようなものがついている。目をやると、右肩から腕にかけて、皮膚が垂れ下がっていた。